

友情・信念・挑戦

今年の書き初め大会で書いた文字です。1年生が「友情」、2年生が「信念」、3年生が「挑戦」でした。学年に合った文字だと思いました。2月18日(火)の集会で表彰を行いました。玉名荒尾の書き初め大会で入賞した人は62名もいました。おめでとうございます。初心を忘れず、頑張ってください。



多様性を認める三中

3年生の卒業式まであと15日となりました。全員の進路先が決定するまで、学年・学級で油断なく学校生活を続けています。また、3年生は「進路公開」の授業を行っています。4月になって離れ離れになる友だちに自分のことを伝える授業です。伝えたい人が伝え、それに応えたい人が応えるというのを基本としています。話を聞いて、その人の知らなかった一面が分かり、さらに絆が深まります。一人ひとりの顔が違うようにこれまでの人生も違いますし、これからの人生も違います。しかし、目に見える、聞こえる部分が違っても、その人と自分を重ね、共にこれからも頑張っていこうという“想い”が授業から生まれます。荒尾市が目指している「人権文化の花咲くまち」・多様性を認めあう社会の担い手になっていると実感します。



多様性を考える「出会い、ふれあい、心の輪」

前回に引き続き、作品を紹介します。

一般区分最優秀賞

「2回目の人生、精神障害者11歳」

東京都

「えー、まなえ銀行員になったの?！」と高校時代の友人が、驚きの表情を浮かべる。「そうなんだよ、銀行の事務員になったの」と彼女の勢いに驚いて少し笑ってしまった。高校時代、私は豪放磊落な性格で知られ、「困っている人の声を拾うジャーナリストになる」と、そう公言して憚らなかった。友人の驚きは、夢を追うのをやめ、真面目なイメージがある銀行員になった事への当然の反応であった。私のこの変化には、私が精神障害者になった事が大きく影響している。

19歳の春、突如障害者となった。疾患名は双極性障害I型。異常に気分が減退し落ち込む鬱状態と、異常に気分が高揚し跳ね上がってしまう躁状態を繰り返す精神障害である。「普通の人でも気分の浮き沈みはあるよ」と思われるかもしれない。しかし、躁状態の気分の昂進は、病的なものだ。普通の人々が、公園の花壇の鉢植えから花を抜き、下着姿でそれをハンマー投げよろしく投げるだろうか。そして、普通の人々がその現場を通報され、警察沙汰となるだろうか。これは、私が躁で引き起こした事の一例だ。恐ろしい事に、ここまで異常なのに病識がない。むしろ自分の事を天才だと思いつつ、心配する家族や友人を、この天才を理解できないとんでもないアホだと思っていたのだ。

鬱^{うつ}状態^{じょうたい}では、躁^{そう}でやさかした全ての事^{こと}を猛烈^{もうれつ}に後悔^{こうかい}した。希死念慮^{きしねんりょ}に襲^{おそ}われ、自室^{じしつ}のベッドに引きこもった。そんな浮き沈みを経験^{けいけん}して11年。この間に、計4年間の引きこもりや、閉鎖病棟^{へいさびやうどう}への長期入院^{ちやうきにゆういん}を複数回^{たいくすうかいけいけん}経験^{けいけん}した。大学在学中^{だいがくざいがくちゆう}も、休学^{きゅうがく}を繰り返した。「困っている人を助けるジャーナリストになる」どころか、自分自身が「困っている人」そのものになったのである。毎日闘病^{まいにちとうびやう}する事で精一杯^{せいいつぱい}の私が、当然将来^{たうぜんさいらい}の夢など思い描けるはずもなかった。さりとして人生は続く。なんとか就活^{しゅうかつ}生^{せい}となった私は、現実^{げんじつ}を見なくてはいけなくなった。

2018年に障害者雇用枠^{しょうがいしやこうようわく}の法定雇用率^{ほうていこうりつ}に精神障害^{せいしんしょうがい}が追加^{ついか}された。これを受け、私は障害者雇用枠^{しょうがいしやこうようわく}での就活^{しゅうかつ}を始めた。就活を進めていくと、そこで初めて自分以外の障害者^{しょうがいしや}の人々と、リアルに触れ合う事になる。そして障害には「わかりやすい」障害と「わかりにくい」障害がある事を知った。

障害者雇用のインターン会場^{はくじやう}に行く。まず目に入^{めいれ}ったのは、白杖^{しやくじやう}を手^てにしている人、手話^{しゅわ}で会話^{かいわ}する人、車椅子^{くるまいす}で移動^{いどう}する等^な、外見^{がいけん}から「わかりやすい」障害の方^がだった。外見からは「わかりにくい」学生^{がくせい}と話^わしていると、「内部障害^{ないぶしょうがい}なんです」と教えてくれた。

帰り道^{かえりみち}で思いを馳^はせた。この世には様々な障害^{たまたま}があり、様々な闘^{たたか}い方があるのだと。そして私は、外からどう見えているのだろうか。内部障害^{ないぶしょうがい}の彼女のように、私の障害もきっと外から分かりにくい。ならば、積極^{せっきよく}的に外に発信^{はつしん}していかなければ、私の障害は、私の困っているは、きっと無いものになってしまう。それだけは、絶対^{ぜったい}に嫌^{いや}だと思った。そして、私の「困っている」は、きっと私だけのものじゃない。そんな直感^{ちよくかん}があった。

とある銀行^{ぎんこう}に入^い行^{こう}した。決め手^{きめて}は「人」であった。説明会^{せつめいかい}での障害者雇用担当^{しょうがいしやこうようたんとう}の方が纏^{まと}う温^{あたた}かい雰囲気^{ふんいき}。そして障害を持つ行員^{こういん}が実際の体験談^{たいけんだん}を話^わしていた事に、興味^{きょうみ}を抱^{いだ}いたからだ。面接^{めんせつ}を重ねていくうちに、会社全体^{かいししぜんたい}も温かい雰囲気^{ふんいき}であるところに惹^ひかれていった。障害者^{しょうがいしや}の仕事^{しごと}に対して配慮^{はいりよ}はしても遠慮^{えんりょ}はしない方針^{ほうしん}にも共感^{きうかん}を覚^{おぼ}えた。「この会社の人たちと、私は頑張^{がんば}りたい」。そう思った。

入行^たして4年^{ねん}が経^へった。この間メンタル面^{ちやうし}の調子^{くず}を崩^{きやうしよく}して休職^{きゅうしよく}する事もあった。しかし、「長い人生、4ヶ月のブランクなんてどうとでもなるから。焦^{あせ}らないで」と温かい言葉と配慮^{あせ}をしてくださる上司^{じょうし}に恵^{めぐ}まれた。

同じチームには、視覚^{しかく}や聴覚^{ちやうかく}障害^{しょうがい}の先輩^{せんぱい}がいる。拡大読書器^{かくだいどくしよき}や補聴器^{ほちやうき}を使うその仕事^{しごと}ぶりは健常者^{けんじやうしや}に全く引^ひけを取^とらない。

オープン就労^{しゅうろう}している同期^{どうき}は、肢体不自由^{したいふじゆう}だが車椅子^{くるまいす}を使^くわない。「車椅子の障害の方は、車椅子モテがあるんだ」とぼやく彼は人間味^{にんげんみあふ}溢^{あふ}れていて、つい笑^{わら}ってしまう。先天性^{せんてんせい}障害^{しょうがい}の彼の半生^{はんせい}に私が興味^{きょうみ}を持つように、彼も中途障害^{ちゅうとうしょうがい}の私の半生^{はんせい}に興味^{きょうみ}を持つようだ。

「人生の途中^のから急に障害者^{しょうがいしや}になるってどういう感じ？」と、ある飲み会^ので彼^{かれ}に聞^きかれた。「私もそれ気になる」と視覚障害^{しかくしょうがい}の先輩^{せんぱい}もこちらを見る。言語化^{げんごかわずか}難しいなと思^{おも}いつつも「えーと、2回目の人生が始まった感じかな」と答^{こた}えると、なるほどね、と2人は頷^{うなず}いた。障害者になる前^{まえ}には戻^{もど}れない。でもそこで人生が終わったかというのと、そうでもない。そう伝え^{つた}えなかった。2人の顔^{おもて}を見てほっとした。

入行^{かた}のきっかけ^{かた}となった方は、障害の有無^このバリア^こを越^こえて分^わかり合^あおうと歩^あみ寄^より^を続^{つづ}けてい^いる。キャリアコンサルタントの資格取得^{しかくしゆとく}であったり、視覚障害^{しかくしょうがい}の歩行体験^{ほこうたいけん}への参加^{さんか}であったり、彼女が声かけしてくれる「一歩ずついきましょう」は、時に「生きましょう」とも私の耳^{みみ}には聞^{きこ}こえてい^いる。

「分かりにくい」精神障害^{せいしんしょうがい}が法定雇用率^{ほうていこうりつ}に追加^{ついか}されて6年。まだまだ少ない特例^{とくれい}を、誰^{だれ}かにとっての前例^{ぜんれい}にしたい。職場^{しよくば}で触れ合う皆^{みな}さんのように、私もポジティブな環境^{かんきやう}を誰^{だれ}かに与^{あた}えられるようになりたい。ジャーナリストになれなかったけれども、少しでも「困っている人」を減^へらしたい。「分かりにくい」障害になったからこそできる事^{こと}を探^{さが}す私の2回目の人生は、精神障害者^{せいしんしょうがいしや}として11歳。まだまだ始^はまったばかりである。

